

上方落語に見られる終助詞の語用論的分析

A Pragmatic Analysis of the Final Particles in the Kamigata Rakugo Stories

角 岡 賢 一
KADOOKA Ken-ichi

要旨

In this paper, a pragmatic analysis of the final particles will be shown citing the examples from the Kamigata Rakugo stories. Final particles are a syntactic, semantic and pragmatic category which is peculiar to the Japanese language, and cannot be found its counterpart in English. Those particles discussed in this paper are different from those of the current standard Japanese: *wa, ya, na, ja, wai, kai, nai, jai, wae, kae*. One of the characteristics among these particles is that there are gender differences; some of them are peculiar to the male language, and others are peculiar to that of female. Another point is that these particles are chosen with regard to whom the utterance is spoken; to those members of senior to the speaker, similar or junior. From the pragmatic respect, these choices are quite insightful.

Keywords

上方言葉 (Kamigata dialect)、終助詞 (final particles)、尊敬語 (honorific expressions)、卑罵語 (pejorative expressions)

第一節 はじめに

本稿では、日本語待遇表現という見地から上方言葉に見られる終助詞について論じる。終助詞という統語範疇は、日本語学（国語学）においても、中心的に論じられることが相対的に少なかった分野であろうと思われる。『日本語文法事典』には、「話し手の気持ちを表すモダリティ表現」という見出しの下に次のような説明がある（265 頁、下線は原文）。

(1)

終助詞（文末助詞、文末詞）は、主文末につき、聞き手に対する働きかけや発話時における話し手の気持ちの動きを表すモダリティ表現である。男女差、年齢差、地域差、文体差が大きい。
[強調] 行くよ。行くぞ〈男〉。そりゃそうさ。大丈夫だって（ば）。早く行こうぜ〈男〉。
[疑問] そうですか。そうかしら。これ誰だっけ。どうなることやら。何考えてるんだか。
[確認] わかったね。わかったな〈男〉。さっき言っただろうが〈男〉。いいじゃない（か）。
（一例略）

「詠嘆」いいねえ。いいなあ。そりゃすごいや〈男〉。

「その他」少し遅れるって〈伝聞〉。行くな〈禁止〉。だって寒いんだもん。もちろんですとも。

ここで挙げられている意味範疇の多様さは、目を見張るばかりである。強調、疑問、確認、詠嘆、伝聞、禁止というように、広い範疇に及んでいる。それ以上に注目すべきは、これら分類が「モダリティ表現」という見出しの下に括られているという点である。拙編著『機能文法による日本語モダリティ研究』（2016）、*Japanese Mood and Modality in Systemic Functional Linguistics*（2021）で日本語や英語のモダリティについて論じているが、それは基本的に意味論という枠組みにおいての分析であるという意識があった。対象とした統語範疇は、英語、日本語共に助動詞を中心とした。しかし本稿で論じようとしている終助詞の分析は、語用論に立ち入る範囲の方が大きいのではないかと考えている。その点、意味論や語用論という「縦割り」の区分をしない選択体系機能文法の枠組みは貴重である。モダリティについても、「肯否極性の中間に位置する意味領域」という独特の定義をしている（上掲の拙編著を参照されたい）。

他方で禁止の「な」は、「行け」という命令形と対比すると統語論的な側面も有すると言える。これは選択体系機能文法で謂う肯否極性という両極による区別である。また、話し手の性差にも着目する必要がある。上掲例では〈男〉として男性語例が挙げられている。その後は女性語の例として「わかったわよ」という項もある。このような性差も、意味論というよりも語用論で扱う方が妥当であろう。「わかったね」は男女共用であろうが、「わかったわよ」は女性語であり、性差が区別される。「わかった」という部分が命題であるとする、「わよ」「ね」など終助詞は話し手の性差や聞き手との上下・親疎関係などが加味される語用論的要素であろう。

上掲書では（1）に続けて、更に多様な例が挙げられているが、最後に意味記述について留意すべき点について説明がある（同頁）。引用する（下線は略し、例には通し番号を附した）。

（2）終助詞の意味記述の際には、「終助詞が表す基本的な心的態度」と「具体的な場面で終助詞を使用する際の話し手の気持ち」とを区別し、両者を関連づけて説明することが重要である。たとえば、「さ」は「当然」「達観」「放任」などの気持ちで用いられるが、根底にあるのは「これ以上考える必要はない」という心的態度である。

①そりゃそうさ。（あらためて考えるまでもなく当然だ。）②そのときはそのときで、なんとかするさ（くよくよ考えてもしかたがない。）③好きにすればいいさ。（自分はこれ以上考える気はない。）

ここで言う「心的態度」は、そのまま「モダリティ」と置き換えることが可能である。つまり、意味論で扱うべき領域である。そうであるとするならば、終助詞「さ」の基本的心的態度というのは「これ以上考える必要はない」という一点に要約されるであろう。更に細かい分類である「当然」「達観」「放任」などの気持ちは「具体的な場面」という発話状況に即した感情であり、語用論的考察の対象とするべき要素であると言えよう。例文①は、目前にした事態が当然であるという話し手の判断を示している。②は煮詰まった事態に関して、「もうこれ以上考えるのは止めよう」という諦観であろう。③は、おそらく第三者が何か行動を起こそうとするような状況における発話と考えられる。聞き手に対して直接に話しかけたという状況は想像しにくい。

説得したとしても無駄であろうから、話し手は関わることを放棄したという考えを示しているのである。いずれも、例文後に括弧書きされている補足は、雄弁に話し手の内心を物語っていると言える。

次に日本語以外に、終助詞と似たような統語範疇があるか、という観点に視野を広げてみる。まず着目するのは、現代中国語（北京語）の語気助詞という範疇である。語気助詞は、日本語の終助詞と同じように、基本的には節末（文末）に位置する。小学館『中日辞典』には、「助詞」という見出しの下に次のような説明がある（1937 頁）。

(3) 4 語気助詞

語気助詞は、言葉を発する際の話し手の態度を直接に反映し、文の意味のなかで感情的・感覚的な面の表現を担う語である。

たとえば、「そうです」と返事をする場合、目上の人に対するあらたまった返事であれば“是。”と言う。しかし互いに遠慮なくうちとけて話をしている場合なら“是”だけでなく、相手に心を開いた、素直に語りかけるといった話し手の気持ちを語気助詞“啊 a”や“呀 ya”のように言う。訳せば「そうなんだ（よ）」「そうですよ」「そうよね」などとなる言い方である。

まずこの記述だけでも、現代北京語の語気助詞と日本語における終助詞の共通点が浮かび上がってくる。両言語とも、「話し手の感情や気持ちを潜在的に言語化する」という機能において共通している。実際の場面においては、日本語で返事として「そうです」と終助詞なしで応じる方が簡潔であって、その分礼を失しない。中国語においても語気助詞なしで“是”とだけ簡潔に応じている。日本語では「そうなんだ」「そうよね」というのは、敬語でない常体を採用することによって、話し手が聞き手に対する人間関係の距離を短く捉えていることが窺える。「そうなんだ」と「そうなんだよ」は終助詞「よ」があるかないかの差だけで、発せられる語用論的状况には大きな違いが認められる。「そうなんだ」は関東方言以外の話者にとっては、自然な感覚で相槌を打つのは難しいと言える例である。しかしながら、男女共用で相手の言い分に対して軽く現状認識を示す、あるいは自分自身で得心するような場面での相槌であると思われる。上方言葉では、やはり男女共用で「そうなんや」となるであろう。他方で「そうなんだよ」というのは、男性語として相手もしくは自分の言い分を強く肯定するような状況が想定される。「そうですよ」は、敬体を採用することによって、話し手と聞き手の間にやや遠い距離感を演出する。「そうよね」は女性語であり、親しい間柄での会話であるという状況を想像する。このように、たった四例の文から、話し手の性別や聞き手との人間関係や距離感まで非常に詳細な背景を想像することができるのである。またそれを分析するのが語用論の醍醐味であるとも言える。

現代北京語には日本語のような常体と敬体という区別はないものの、“啊”や“呀”というような語気助詞を付加することによって、日本語の「そうなんだよ」「そうよね」（傍点はここで付加した）という言い方と全く同じような効果を上げている様子が窺える。この辺りは、動詞＋目的語という語順にしろ、モダリティ表現に関わる法助動詞体系にしても大いに異なる日本語と中国語を比較対照してみても、驚くべき類似性があると言える。

順序として、“啊”や“呀”というような語用論的機能を有すると考えられる語気助詞に続いて、上掲の語気助詞という項目では疑問文に付加される“嗎”の例を挙げている（同頁、簡体

字は日本字に改めた)。

(4) “嗎”は「はい」「いいえ」で答えられる疑問の時にのみ用いられ、(中略)。たとえば、
你去嗎？ あなたは行きますか。(中略)

これを語気助詞を用いず次のように言うこともできる。

你去不去？ あなたは行きますか。

ここで観察されるように、現代北京語の語気助詞“嗎”は日本語の疑問終助詞「か」に対応するように思われる。両言語共に、「你去嗎」、「あなたは行きますか」というのは話し手が聞き手に対して動作の意向を問う疑問文となっているのである。このような機能は、統語的と意味論的な側面を兼ね備えていると言えるであろう。

ところで、両言語で語気助詞と終助詞がない文例を考えてみると、両言語では大きな違いを示す。現代北京語で「你去」というのは「行きなさい」という命令文である。語気助詞の“嗎”は平叙文を疑問文にするという機能を果たしていることが見て取れる。ところが日本語の「あなたは行きます」というのは、統語論的には文法的であっても、実際の場面においては不適格である。聞き手に面と向かって、このように言い切りの文型で断言するというのは不可能なのである。

ここで、現代北京語語気助詞の一つとして、“吧”の例文を見てみよう。唐玉紅氏と鄒善軍氏の共著論文「確認要求を表す「だろう」と“吧”の日中対照研究」(2015)は、題名に端的に研究対象が提示されている。「確認要求」というのは、ここまで見てきた話者の心的態度(モダリティ)の具現であると言える。まずは論題通りに日本語の「だろう」を中国語訳と対応させている例を引用する(88頁、簡体字は日本字に改めた。下線は原文、以下同じ)。

(5) 佐竹「美由紀は —」

隆之「来年は、大学受験だよ」

佐竹「—」

隆之「もう、ずいぶん会ってないだろう？ 小さい頃は、ここにもよく来てたもんな。横須賀のオジイちゃん、オジイちゃんって—」

佐竹 美由紀呢？

隆之 来年考大学。

佐竹

隆之 已經好久沒見了吧？ 小時候还經常来这兒来着。總是喊着横須賀爺爺、横須賀爺爺

中国語訳では、「もう、ずいぶん会ってないだろう」に対して「已經好久沒見了吧」が対応する。日本語の「だろう」が“吧”と訳されている。統語範疇としては、日本語の「だろう」は助動詞であり、中国語の“吧”は語気助詞である。中国語の語気助詞は、形態としては日本語終助詞のように節末(文末)に位置し、無変化である。*1機能としては、話し手が聞き手に対して命題の確認を要求している、という点で両言語で共通している。

もう一例、日本語で「だろう」以外の文体になる例を引用してみよう(87頁)。

(6) 純「結ちゃんは？どこで働いてるの？」

結「魚の加工場」

純「そうか」

結「だけどこのごろは不漁つづきでしょ、だから夜中にコンビニでパートしてる」

純 結呢？在哪兒工作？

結 魚的加工廠。

純 是嘛。

結 不过、最近是魚荒吧？所以夜里在便利店打工。

日本語では「だろう」と「でしょ」で文体の違いはあるが、確認要求という機能は共通である。上例(5)での「だろう」は男性語で、ここでの「でしょ」は女性語である。これは「でしょう」という正規形の母音が短縮された言い方であるが、「でしょう」ならば男女共用である。このように日本語における語用論的性差は、微妙な次元で具現されることもある。両例共に現代北京語では「吧」と訳されていることから、現代北京語にはこの語気助詞に関して性差はなさそうである。

次は逆に、中国語から日本語への訳という例を検証する(91頁、下線は原文、簡体字は日本字に改めた)。

(7) “什么？你瘋了吧？”韓太太斜睨着他，“奇珍斋你能搬送？这房子你能搬送？还有你满屋子的玉，也能搬送？”

「何？あなた気が狂っているじゃないの？」韓奥さんは彼を睨んで、「奇珍斋は運んでいける？この家は運んでいける？この家にある全ての玉も運んでいける？」

下線部の日本語訳としては「気が狂ってるんじゃないの」と、説明の「の」(音声的・音韻的变化によって「ん」と撥音化した)を挟む方が自然であろう。ここでは、「気が狂ってるのだろう」と断定したのでは、表現がきつすぎる。話し手の判断が一方的になりすぎるからである。「じゃないの」と否定形にしたのは、このような語用論的配慮があったものと考えられる。統語論的には、「で」+「は」+「ない」+「の」(接統助詞+格助詞+特別形容詞+終助詞)という複雑な構造を示している。「で」+「は」→「じゃ」という音声的・音韻的变化も経ている。

本節ではここまで、日本語終助詞についての概説的な総括をし、現代北京語の語気助詞と簡単に対照してきた。ここまでの検証では、当該統語範疇が統語論的・意味論的・語用論的に横断して意味を形成していた様子を窺うことができた。以下の節では、上方言葉に見られる終助詞を、尊敬語と卑罵語という分類に即して分析していく。

第二節 尊敬語に見られる終助詞

本節では、上方言葉の尊敬語表現に見られる終助詞を、上方嚙の実例から引用して分析する。登場人物間の人間関係などは、語用論的分析では不可欠な要素である。

話し言葉として終助詞は極めて多様な意味を含み、語用論的に興味は尽きない。特に会話に

おいては、どのような状況で誰が誰に対して、どういう意図で発話しているかという要素は考察に不可欠である。また男女の性差も、終助詞の使用によって際立ってくる。

神尾氏『情報のなわ張り理論』では、「ね」に代表される終助詞の機能を「現在の発話に関して、話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報とが同一であることを示す必須の標識である」と定義してある（62頁）。この定義は、その後論述の展開に応じて変更が加えられていくが、以下の例証ではこの定義で事足りると考えられる。それ以上に、実際の用例で見られる多様性に着目すべきであるように思われる。

以下では、丁寧度の高い部類から分析する。

「じゃわやい、なわやい」

いきなり極端な例で始めるが、これは義太夫節で語られる、時代がかった語り口である。

噺『胴乱の幸助』で、稽古屋で義太夫節の稽古を付けている場面がある（米朝全集第五卷）。*2そこでは『桂川連理柵』帯屋の段から、「親じゃわやい」「ちえー、あんまりじゃわいなあ」という節が語られる。姑おとせと嫁のお絹が丁々発止と渡り合う場面である。小佐田氏『落語研究会 桂米朝全集』はこの演目についての解説で、原本の義太夫節では姑おとせの台詞は「親ぢやぞ、親ぢやぞ、親にむこうて何を不足」であるという指摘がある。ここでは噺に取り入れた際に、多少の台詞入れ替えがあったものと思われる。

噺『三枚起請』で、娼妓の小輝に騙されて二十円（今の額なら数十万円相当か）という大金を工面させられた清八は、妹の奉公先に給金の前借りを頼むなど苦労は一通りではなかった（第四卷）。騙されたと分かった途端に「妹が不憫な、かわいそうじゃ」と嘆くうちに芝居がかってきて、「ま、不憫なわやあい」と節を付ける。喜六が調子を合わせて口三味線で「ツンツンツンツン」と合わせる始末である。義太夫節が登場する『軒付け』や『寝床』などでも、節付きの語り口が如何に大仰かという比較がネタの一つになる程である。普段の話し言葉とは全く別物である点に注意は必要であるが、言語学的観点からは貴重な例である。「な」は形容動詞語尾の一部、「わ、やい」がそれぞれ終助詞である。終助詞の併用によって、語り手の意図が強調されるという効果が高められると考えられる。

「のや、のじゃ」

複数の終助詞を組み合わせると、単独でも多様な語感が一層複雑さを増す。「の」と「や、じゃ」を組み合わせると丁寧度が上がる。単独の「や」と「じゃ」では、「じゃ」の方が重々しく聞こえる。また、現代の標準的な日本語に置き換えて「のだ」というように考えると、説明モダリティという範疇になる。

以下で挙げるのは立場上、社会的に重いと考えられる村の庄屋や大店の当主というような人物が発言する場合である。まずは噺『狸の化寺』で、切れた堤の修繕を頼んだ村のお庄屋さんが請負衆の頭に、泊まってもらふ場所として寺はどうかと提案する（第五卷）。「いや、寺はあるのや。寺はあるんじゃが、そこへ泊まっていただけんというのは、実は、もう長いこと住職がおらず無住のままになってますのや」と説明を始める。「のや」というのは説明口調である。

ここで、『正月丁稚』という噺から例を挙げてみる（第四卷）。噺の冒頭で、店の当主が丁稚の定吉に言葉遣いを教える。

(8) 旦「ものの頭におの字を付けると、丁寧聞こえるな」

定「ああ、おの字を付けまんの。はな、正月言わんと、お正月てなもんでんなあ」

旦「そうそう、そういうふうに言うのじゃ」

定「ほな、旦さんなら、御旦那さんと、こない言いまんねやな」

旦「御旦那さんはおかしいが、まあまあそういうとこやなあ」

定「ほな、御寮さんやったら、おん御寮さん」

旦「いや、御寮人には、初めから御の字が付いてるさかい、それは要らんのや」

定「ほな、番頭はんやったら、御番頭さんてなもんで」

旦「そうじゃ」

普段から言葉遣いが粗雑であった定吉に、当主はこれを好機と丁寧な言葉遣いを教えようとしている。名詞には「お、ご」を接辞する、という基本的な教えである。「それは要らんのや」というのは、現代の標準的な日本語に置き換えるとすれば「それは要らないだよ」という辺りが相当するであろう。「それ」というのはここでは「ご寮人さん」に更に接辞しようという「御」の字を指しているが、「それが不要である」という命題を話し手の意図として強調したいがために「のや」と語尾を足すものである。

続けて、当主が年始の挨拶廻りに出かけるのに定吉にお供を申しつけている。

(9) 定「ああ、旦さん、もう遊びに行けまんのやなあ」

旦「これこれ、そちにはまだ用事がある」

定「なんでわたいに用事がおまんねん」

旦「これから年始回りに行く。そのお供についといで」

定「うーん、そんなんやったら、亀吉とんかて、友吉とんかて、いてまっしゃないか」

旦「いやいや、亀吉や友吉ではいかんねん。年始のお供にはそちはまことによい似合うねん」

ここでは定吉の「行けまんのやなあ」に「のや」という終助詞連続が見られる。(9)に後続する場面で、若柳の水を汲む折りに「今日はちょっと、唱え事をせんらん」「唱え事と言いますと」「歌詠みをしますのじゃ」という掛け合いになる。「しますのじゃ」という物言いは、丁寧語「ます」に「の、じゃ」という終助詞連接型が後続するので、丁寧度が高い。語用論的に興味深いのは、統語論的・意味論的に「しますのじゃ」という言い切りではあるが「歌詠みをするのですよ、歌詠みをしなさい」という行為の促進になっているという点である。

また『地獄八景亡者戯』では、三途川を渡る船の船頭が鬼で、「さあさあ、そこの歩み板を渡ってどんどんどんどん乗り込むのじゃ」と亡者を促す(第四巻)。ここでは鬼が亡者に船に乗り込むよう命じているという場面であるから、命令口調である。

終助詞の併用は、まだまだ例がある(第二巻)。晰『親子酒』では、酩酊して帰って来た俵の作次郎が自分の家に帰り着くまで散々迷うが、その途上で「お前、東に行かなあかんやつを西へ来てるさかい、こういうことになんのやがな」と近所で言われる。品詞分解すると、「なる+の+や+が+な」と形式名詞「の」の後に終助詞「や、が、な」と三つが連なっている。もっと複雑に、例えば「なるのやないかいな」と言い換えることも可能であろう。このように終助詞を重ねるとするのは日本語全般の特徴である。話し手の心理を想像してみると語用論的に興

味が尽きない分野である。

「の、のう、のん、ん」

終助詞「の」について『大阪ことば事典』(544頁)には「意を強めるために用いる婦人用語であるが、やや品が落ちる」という説明があり、「うれしやノ・いややノ・おお寒やノのように、ヤのあとに続く」と例が挙げられている。しかしこの定義に該当する例は、少数に留まる。この規範から外れる終助詞「の」も多様である。本項では、広い範囲から用例を集めることとする。「のう」と一拍延びると、侍言葉のようになる。「のん」は撥音付加で二拍になり、柔らかく響く。その響き故、女性が多く用いると考えられる。「のん」が撥音だけの一拍「ん」になる音声・音韻変化も観察される。このように終助詞「の」は音声・音韻変化によって多様な形を見せると共に、用例も多い。話し手や場面も実に多様である。

上述の「婦人用語」という指摘にお誂え向きであるのが、噺『初天神』の例である(第六巻)。遊郭に子供連れで行ったところ、子は階下で留め置かれて金平糖や煎餅を供される。子はそれらをすぐに食べてしまうので、女当主は「あーせわしやの、この子」と嘆く。形容詞「忙しい」の語幹「せわし」に「や+の」と終助詞を連ねている。この噺では、子の寅が随分と細かいことまで聞き覚えて母親に報告している態になっている。もう一例、噺『住吉駕籠』から挙げる(第四巻)。女が駕籠屋をなぶろうとして、住吉から板屋橋*3まで「ただで行き」とからかい、「女子おなごやと思て、なぶってけつかったら承知せんで」と凄まれる。傍らの亭主に「怖やの、い、ちょっとこちの人、待っとおくなはれな」と助けを求める。形容詞「怖い」の語幹に助詞「や+の」を連ねた形である。また『舟弁慶』でも同様に女性語の例がある(枝雀師の口演筆記*4)。清八が喜六宅を訪れて、夏の暑い盛り、大川に船を浮かべて夕涼みをしようと誘う。そこに帰って来た喜六の妻女は、「雀のお松、雷のお松」と二つ名を奉られるほど口達者である。長屋に帰ってくるなり、「おお、暑やの」と大声で立ち話を始める。喜六は恐妻家で、この声を聞いた途端に震え上がってしまう。ここでは「の」という終助詞一つで、お松つつあんの人となりや場面を的確に描写しているのである。

女性語とは対照的に、お裁きもので奉行の言葉遣いとして終助詞「の、のう」が多用されている。噺『帯久』で西町奉行の松平大隅守が「南瓦屋町二丁目、帯屋久七、出とるの」以下、関係者一同がお白洲に揃いおるか確かめるために「出とるの」と繰り返す(第二巻)。単純な質問ではなく、確認という趣がある。以下のお調べでは、帯屋が和泉屋に借りた金百両を、大晦日のどさくさに紛れて懐に入れて持ち帰った件を詮議する。奉行は「そのほうは、この和泉屋武兵衛とは縁家にあたるのか」「和泉屋与兵衛、帯屋久七とは縁家にあたるのか」というお尋ねで「のか」と終助詞「か」が加わる。お取り調べは続き、和泉屋与兵衛は恨みの余り帯屋久七宅に火を付けた一件について「火ぐらい付けてやってもええと思いましたがんで」という言に「穏やかならざることを申すのう」と返している。「出とるの」における「の」が、「のう」と一拍延びた形である。「の」と「のう」では、語感はかなり異なる。一拍延びると余韻が大きくなるので、詠嘆などの感情表現が豊かになるように思われる。それと同時に、奉行の言葉遣いとしては些か庶民的ではないかとも感ぜられる。続く場面では「うむ、帯屋久七、そのほう十年以前、和泉屋に恩義にあずかっておるの」「百両の金をそのままにして出るといのは、金に厳しき商人としては、ちとその意を得ぬがのう」というように、「の」と「のう」が交互に使われている。これはどうやら、演者によって奉行の心理を反映して、このような使い分け

になっているようである。

噺『抜け雀』では、以前に無賃で泊まり、その形として屏風に雀の絵を描き残していった絵師が身形を整えて再訪し、「亭主、久しいのう」と挨拶する（『米朝全集』第六卷）。絵師の言葉遣いは、侍言葉に近い。

一拍の「の」に撥音が付くと「のん」と二拍になる。噺『七度狐』で、べちよたれ雑炊という怪しげな雑炊を振る舞われている清八が、「何や、一寸ぐらいに切ってあってな、かみしめると甘い汁が出まんのやが、この藁みたいなもんはこれは何でんねん」と尋ねた（筑摩書房版米朝全集第二集）。庵主さんは「そら、藁みたいなもんやない、藁でおますのん」と返答する。清八にしてみれば、藁を食した経験はないものの、馬でもあるまいし、現に口にしているものがまさか藁ではあるまいという気持ちで尋ねたのであろう。それを庵主さんは「藁みたいなもんやない、藁（そのもの）でおます」と切り返すところに面白みがある。「のん」と撥音が付いて二拍になることによって、音響的に余韻が残るような語感となる。

形が「の」から「のん」と二拍化されると、用例が多様になる。上述の「婦人用語」という限定は最早該当せず、男女共に用例が見られる。噺『瘤弁慶』大津の宿で、清八と喜六が風呂を先にするか、ご飯を先にするか思案している（第三卷）。清八は「ほんなら、ご飯先にするのんかえ」「ほな、風呂先にすんのんか」と重ねて喜六に尋ねる。両例とも、「するのんかえ、すんのんか」と一拍の「の」だけで言い換えても語用論的意図は全く同様である。疑問の終助詞「か」が、「かえ」という形になるのは珍しい。どちらかと言うと、女性語のような柔らかい響きである。

噺『地獄八景亡者戯』では、幫間の一八が「そのお婆んというのを金でうんといわしたらよろしいのん」と尋ねる場面がある（第四卷）。三途の川を渡するために三途河の婆に袖の下を渡して、着物を剥ぎ取られるのを免れようという魂胆である。ここで、一八は男であるという点に注意が必要である。これは尋ねているのであるから「よろしいのんか」とも言える。疑問を表す終助詞「か」がないと、柔らかく聞こえる。もう一例、疑問と解釈される「のん」を噺『不動坊』から挙げる（第七卷）。独り者仲間の利吉に悪口を言われたとて、意趣返しに相談に集まっている席上、徳さんが利吉宅に不動坊先生の幽霊を出そうと提案する。それに対してゆうさんが「幽霊出すのん」と訊き返す。これは本来は「幽霊出すのんか」という疑問形であるが、勢いで語尾が「出すのん」となったものであろう。

音韻論的に非常に興味深いのであるが、この終助詞「の」または「のん」が撥音化して独立した音節を形成しなくなる現象が観察される。「ん」だけになるのである。これは終助詞「の」が『大阪ことば事典』の語釈よりも広い範囲で用いられていると思われる。例えば、男女に関わりなく用いられている様子が実例収集から窺える。例えば噺『いもりの黒焼き』で、男が自分が着ている「四季の着物」について説明する段、「あつらえたわけやおまへんねん、自然にこないなったん。初め、これ薄綿が入ってましてん。綿が切れてみな下へ落ちてしもたん」（第一卷）。「こないなったんだ（す）、落ちてしもたんだ（す）」というように助動詞「だ（す）」を補えば、言い切りとして落ち着く。それを「こないなったん、落ちてしもたん」と撥音止めにすると、言い切りではない分、余韻を残すような効果がある。また、「こないなったんでんねん、落ちてしもたんでんねん」と「でんねん」を足せば落ち着くが、ここまで終助詞を連ねると諄くなる。

次は噺『天狗さし』から挙げる（第五卷）。噺の始め、男が甚兵衛さん宅に金儲けの話を持

ち込む。「こないだ、あんた、わたい餅屋の前通ったん」と切り出す。これも「通ったんだ」の略形と考えて良からう。

もう一例は噺『景清』からである（第二巻）。京の目抜き師定次郎が目を患い、甚兵衛はん宅に行くにも不自由する。行き過ぎてしまいそうになったところを甚兵衛はんに呼び止められて、「いや、今あんたそこへ歩いてたん」「わしそこへ来るんやったら、なんで表を素通りするねん」「いや、わかってたん」と、目が不自由であるのに強がりと言う。ここでも「歩いてたんや、わかってたんや」というように他の終助詞を足せば形としては落ち着くのであるが、「たん」には独特の語感がある。

「ねや、ねん、ね」

本章で論じている終助詞全般について、卑尊度が中立に近づくほど用例が多くなるという傾向を観察することができる。「ねん」は、卑尊度でちょうど中間辺りに位置すると考えられる。「ねん」は「ねや」の二音節目が撥音化したもので、最終的に「ね」となる。「ねや」は二音節ではっきりと言わねばならないが、「ねん、ね」は厳密に区別されないような弱い言い方でも構わない。この「ね」は、現代の標準的な日本語話し言葉の終助詞「ね」とは、使われる状況や語感が大きく異なる。後者では「そうね」「ありがとね」などと文脈なしで気軽に頻用もできるが、「ねん」が音声・音韻変化した上方言葉では、説明的である。事例は以下で示す。『大阪ことば事典』によると、「ねや、ねん、ね」には全て「の、のだ」という言い換えで片付けられている（542～543頁）。以下で、網羅的に分析するのは実際的ではないであろう。以下で引用するのは、用例のごく一部である。

噺『骨釣り』で、船遊びに出かけた若旦那が「今日の魚釣りにはちょっと趣向があるねん」と言う（第三巻）。仮にこれを「趣向があるのや」と言うとしたら、丁寧度が増すと同時に、説明的な態度を感じ取られる。現代標準日本語に置き換えるならば、「趣向があるのだ」というような説明モダリティに分類することが可能であろう。「のや」は統語構造として「のだ」と同じである。しかし「あるねん」には、そのような説明的態度はない。「趣向がある」と言い切りにするのは、きつい語調になるが故に「ねん」を加えて語調を和らげるという機能があるように思われる。『今の地震』と言う小咄で、枕を並べて寝ている新婚夫婦の会話として、「ちょっと、ねえ、あんた、あんた」「なんやねん」という場面がある（第八巻）。新婚とは言え夫婦間の会話であるから、親密度は高い。卑尊度では中間ぐらいと考えておく。次は小咄『狐の国』からである（第八巻）。道に迷うた旅人が、山中で見つけた一軒屋、ままよと一夜の宿を頼んだところが、出てきたのは狐の女房。狐の亭主が「ほなまあ、一晚泊まっていきなはれ」というので部屋の隅で小そうなっていると、狐の友達が訪ねてきて「おい、あすこにいてんのん、人間と違うか」「せやねん」「なんやねん」「いや、道に迷うたさかい泊めてくれ言うんでな、まあ入れたってんねや」「そうかあ。……よう馴れてるやないかい」でサゲとなる。文末は「ねん、ねや」と説明的である。狐が人と同じように喋っているというのがこの小咄の面白みであるが、語尾の「ねん、ねや」も人並みの使い分けである。

噺『常太夫儀太夫』というのは伊勢詣りの途中に挟まれる旅ネタである（第八巻）。噺は『煮売り屋』から続くようになっており、煮売り屋の親爺さんが旅の二人に仕事を尋ねたところ、浄瑠璃の太夫と答えた。更に名前を尋ねると、「名前は……えへん、これが常太夫ちゅうねや。ほいで、わいが儀太夫ちゅうねん」というように「ねや、ねん」が併用されている。両例とも、

説明的態度であると考えられる。そんな名前は最近の番付でも見たことがないと訝る親爺っさんに、「いやもう、ごく近やねん。そやからその番付にはまだ載ったないねや」と誤魔化そうとする。ここでも「ねん、ねや」の併用である。

次に「ね」の例を挙げる。小咄『天神ばち』冒頭で、「おい、手をどないしたんや」「曲がっしてしもて、伸びてくれんね」とある（第八巻）。元は「伸びてくれんねん」というような形であったのが、約まったものであろう。こういう文脈で「ね」で終わる例というのは、珍しい。話が進んで、後ろから飛んできた賽銭を懐に入れたというのを、友達が「そら何をするねん」と咎めている。現代の標準的な日本語に言い換えるとすれば「何をするの」で、元来は疑問形と考えられる。物事を尋ねるといふ叙述法的な文から、詰問調にといふ語用論的変換を遂げたとも言える。「ね」のもう一例は『淀の鯉』という珍しい噺からである（第八巻）。幫間の一八が板前の喜助を旦那のお供に船遊びに連れ出そうとして画策する。喜助が「先祖伝来の御神酒徳利を車に乗せたらえらい酔うた」といふのを一八は「嘘つけあほらしい。どこの世間に御神酒徳利がへど吐くかい」、喜助は「そ、それがあいつは酔いよんね、中に酒が入ったるさかいな」と返す。「酔いよんね」と文末が短くなる分、会話の運びが弾んでいくような調子である。噺『七福神』は、喜六が毘沙門天に連れられて七福神の宴に一座するという趣向である（第六巻）。「へっ。おおっ、こら、みなさんお揃いで」といふのを受けて毘沙門天が「さあさあ、みな揃てんね。ここでお前、なんかやって、座をこう賑やかに持ち上げないかんで」と喜六を諭す。七福神のうち一柱としては、「みな揃てんね」と至って庶民的な口振りである。噺『道具屋』では、例によって名前の知れない男が、佐兵衛さんの代わりに夜店の道具屋を出すことにした（第五巻）。佐兵衛さんが、「そこの電気スタンド、それは足が三本足で、ちょっとおもしろい形なんやけど、一本欠けて立たへんね」と品物を説明する。これも元の形は「立たへんねん」と考えるべきであろう。

「え」

たったの一拍、しかも母音「え」だけで終助詞になる形である。『関西弁事典』京都府の方言概説の章に「かんにんエ」という例で挙げてある（61頁）。以下に挙げる例はいずれも女性の使用で、柔らかく響く。京言葉としては、噺『愛宕山』で祇園町の芸者衆や舞妓衆が愛宕山へお詣りする道中で、蝶が群れ飛んでいるのを見て、幫間の一八に捉まえて欲しいと頼む（『米朝全集』第一巻）。一八が蝶の前で指先をぐるぐる回すのを見た舞妓、「トンボと違うえ」と指摘する。愛宕山を登る場面では「一八つあん、繁八つあん、ここから七曲がりどすえなあ」と、終助詞「え+なあ」を連ねる。

釈師『おてらくご』に、先代笑福亭松喬師の『お文さん』が収録されている。猫いらずのお松と渾名される女子衆が、若御寮人さんにご注進に及ぶ。「あの、お乳母どんの着てる着物、ご寮人さんのより一枚上等でございませ。着物から帯から羽織り、あれ誰に買ってもろうてるとお思いでございます」と尋ねたところが、若御寮人さんは「わたしそなん知らんえ」という返答である。「知らん」という言い切りでは素っ気ないので、「知らんえ」と終助詞「え」を足したものであろう。これによって語調が随分と違って来る。

噺本編ではなく、マクラで振られている例では『京の茶漬け』で見られる（第二巻）。京では「寒おすなあ。さあ、どうぞおあたりやえ、どうぞおあたりやえ」と火鉢を勧めながら灰をかぶせてしまう、というのである。京言葉によって、京気質を描写しようとしているのである。

が、「おあたりやえ」という言い方は珍しい。語尾の「やえ」は「やす+え」かと思われる。大坂でも女性の使用例がある。噺『猫の忠信』で、主人公の駿河屋次郎が吉野家常吉の女房おとわに常吉が稽古屋のお師匠であるお静さんと懇ろであることを告げたところ「次郎さん、用事がないんやったらあんたボチボチ帰りはったらどうえ」と言われる場面がある（第六巻）。ここで挙げた例は、女性語であるという点で共通している。丁寧度はそれほど高くないが、柔らかな語感を持っている。

第三節 卑罵語に見られる終助詞

本節では、上方言葉の卑罵語表現における終助詞を分析する。噺で観察される終助詞も、話し手の性別や状況に応じて多様である。また、出現頻度も非常に多い。噺におけるような日常会話では、終助詞のない言い切りの形はごく少ないと言える。何らかの終助詞を付けないと、自然な会話にならないと言える。以下、分析を進める中で、「わ、わい」「か、かい」など意味範疇は共通で二拍目が「い」となる部類が見られる。それらについては、最終節において総括を行う。

「わ、わい、わいな、わえ」

最も頻用される終助詞の部類が「わ」である。二拍目に「い」を追加して「わい」という形になると、慨嘆するような気持ちが込められると同時に、些か野卑度が上がる。「わい」と言い切る例は女性の使用例では見られない。「わいな」と更に終助詞「な」を加えると語感は一変する。「わ、わいな」は男女兼用である。現代の標準的な日本語では終助詞「わ」は専ら女性語であり、「わい、わいな、わえ」の実例は見られないであろう。

噺『掛け取り』は、長屋の夫婦が大雨の掛け取りを断る苦労談が笑いになっている（第二巻）。おかみさんが「あれもう、わて一生よう忘れんわ」と述懐するのは一年前、亭主の熊はんが亡くなったことにして家賃が家主の好意によって棒引きになった一件である。終助詞「わ」だけの例である。このおかみさんは、それに先だって掛け取りが入れ替わり立ち替わり訪れて来るであろう事を「回ってきたんはわかってるわいな」と先回りしている。「わいな」とは「わい」にもう一つの終助詞「な」が付いている形である。これが仮に「わかってるわ」では調子が弱い。「わかってるわい」では女性の発話として不適切である。「わかってるわいな」となれば、男女共用として自然である。噺『鉄砲勇助』では次々と繰り出される男の法螺話に、話し相手は「おのれのほうがよっぽどやかましいわ」と制する。その後、同じ話し手によって「ほんまにええ加減にせえよ、お前。火が凍るわけがないわ」と続く。次の例は噺『田楽喰い』からである（第五巻）。一人五十銭の割り前で酒を飲もうという算段、「今日、財布を忘れた」という由松に「ああ、こら言うたれんわ」と受ける。これも軽い語感である。

噺『田楽喰い』は登場人物が若い衆で、言葉遣いは少々荒い（第五巻）。その中でも、兄貴分というのは一段と野卑度の高い様子が終助詞にも表れている。連中が、この兄貴分宅に届いた薦被りのご相伴に与ろうと策略を巡らせて、「一升瓶十本を持って帰ってくる途中に割ってしもた」と偽りを言う。兄貴が「どこで割ったんや」と尋ねるので、行き当たりばったりの返答をしていたところ、「どこでもええわい、お前らそんなもん、ガラスのかけらがぎょうさん落ちて人を怪我させたりして（後略）」と、答える方が想定していない展開になった。「どこで

もええわい」というのは、突き放したような言い方である。その前後で仲間内の会話に、例えば酒屋に銭を持って買いに行つてとしても貯まった勘定で現物を受け取ることさえできない、という心配に「そんなことあらへんわいな」と否定する。「わいな」という言い方で語感が柔らかくなっている。

もう一例は噺『天狗さし』からである（同書）。金儲けの相談と称して、餅搗きをする折に振り上げた杵の先に石臼を置いておけば、往復で餅が搗けると相談された甚兵衛さん、「そんなこと相談されたかて、どないもしようがないわい」と、突き放したような返事をする。終助詞の「わい」はこういう語感を持つのである。同じ話で、男が天狗を捕まえに行つたが鞍馬山で僧侶を天狗と間違えて、竹の先に吊り下げて京の町を歩いている。道を行く人から「その坊さん、どないしました」と尋ねられて「何を言うとおんね。ここではしゃべれんわい、なあ」と返答する。半分は自分に言い聞かせるような語感がある。「わ」でもなく「わいな」でもなく、二拍の「わい」は意外に用例が少ない。

次の例「わいな」は噺『つる』からである（第五卷）。横町の甚兵衛はんが、男の質問に次々と答えていくのであるが、最初に「ほな、あんた世の中のことなんでも知ってなはんのか」「なんでもというわけにはいかんが、おまはんらが訊くようなことなら、たいがいわかつてるわいな」という会話で始まる。「わい」に更に終助詞「な」を足している。

この「わい」が「わえ」と音声変化を経ることがある。高母音「い」が中母音「え」へと低くなる。この変化は、以下で見る「かい」→「かえ」より頻度は少ない。例は噺『愛宕山』で、登山中に「早よおいなはれやー」と呼ばれた一八が、「じきに行くわえ」と返事する（第一卷）。「じきに行くわい」では些か荒っぽいが、「行くわえ」ならば語感は柔らかい。

「か、かい、かえ」

終助詞「か、かい」の意味範疇は多岐に及ぶが、最も主要なところでは疑問を表す部類であろう。次には、命令に近い意味合いで、相手の行動を促す場合がある。噺『掛け取り』で亭主の熊はんが「いよいよあかなんだら去年の手エ、もいっぺん使おか」と持ちかける。その返事に妻女は「まだそんなこと言うてんのか、この人」と応じる。「もいっぺん使おか」は純粋な問いかけであるが、対する「まだそんなこと言うてんのか」は反語の調子である。続けて「あれ去年やってこりたやないかいな、あんたが死んだことになるっちゅうやっちゃろ」では「ないかいな」と終助詞が連なる。上述の「わいな」と同じ統語構成で、「かい+な」と三拍である。やはり反語の調子である。噺『次の御用日』冒頭で、当主が丁稚の常吉に「早よ食べんかい」と昼食を食べ終わるのを急かす場面がある（第五卷）。ここでは、「早よ食べんか」という形と意味している内容は同じであるが、「食べんかい」の方が言い方として荒っぽい。半ば喧嘩腰のように聞こえる。常吉が嬢やんのお供に出かけたところ、天王寺屋藤吉という長屋の住人が悪巫山戯で嬢やんを驚かせて、嬢やんが気絶してしまう。慌てて帰って来た常吉が「まあ旦那さん落ち着きなはれ」と間違えるのを、当主は「お前が落ち着かんかい」と窘める。ここでも、やはり荒っぽい語感である。

次は噺『田楽喰い』で、「日本橋一丁目で一升瓶十本割ってしもた」という若い衆の言い分に、兄貴分が「あんなまた南のど真ん中、賑やかなところで不細工に割ったんかい……」と尋ねる。「割ったんかい」自体は疑問で、多少荒っぽい語感がするのを「……」という表記で緩和しているという面があろう。若い衆の言い分が次々と変わるので、兄貴も「今日らまた天王寺さん

はえらい人出やろ。(中略) あんなとこでおのれ不細工に割りやがったんかい」と更に言い方が荒くなる。二度目には「……」なしで、その分口調も荒くなっているような印象を受ける。

もう一例、『近眼の煮売り屋』という噺から挙げる(第五卷)。清八が喜六を騙して、「隣の煮売り屋は親爺が近眼で、金を払わんと肴を持ってきた」と欺く。喜六はそれを真に受けて、煮売り屋に向けて出かける。「なんかしてけつかんねん。あれだけぼろくそに言われて、気兼ねしながら一杯や二杯の酒、飲んでられるかい」とぼやく。ここは独り言の場面である。「飲んでられるかい」は反語的で、「逆もやないけど、飲んでられへんわい」というぐらゐの心情であろう。このように、「かい」は野卑度が高い終助詞である。

このように、「かい」は野卑度が高い故に女性語としては例外的であることが想定される。一例のみ、噺『冬の遊び』で新町の吉田屋というお茶屋の仲居が発する例がある(第七卷)。堂島の相場師が、太夫の道中に案内がなかったことを根に持って、道中の当日に吉田屋を訪れる。「梅檀太夫。えーちょっと呼んで」と無理難題を吹っ掛ける。仲居は「何を言うたはりまんのやいな。今日は道中だっじゃないかい」と手荒な言葉遣いである。常識的には、吉田屋の仲居ともあろう者が「だっじゃないかい」とは、口が滑ったとしか考えられない。ここは「だっじゃないかいな」と言うべき所が、何かの都合で「な」を言いそびれたと解するぐらゐが妥当であろう。

この「かい」が音声変化して「かえ」となることがある。音声的には高母音「い」が中母音「え」に変化するという過程である。注意が必要であるのは、単独の終助詞「え」との区別である。つまり「かえ」は「かい」の変種として扱わねばならない。「帰ったらどうえ」などの「え」とは別物である。噺『上方見物』で、一つ一銭のあんころ餅に味をしめた見物客が、炭団を練っている炭屋を見かけて、「こりゃあ、一つ一銭かのう」と尋ねる(第二卷)。炭屋は「一つ一銭じゃ。ええ、要るかえ」と尋ね返す。「要るかい」と比べると、庶民的な語感である。この後、見物客は湯屋へ行くが、そこで「裸になるのかえ」と尋ねる。この見物客は「東、南」を「フガシ、ムナミ」と怪しげな言葉を操るように描かれてはいるが、「かえ」の実例として採っておく。次は噺『愛宕山』からで、麓から二十五丁上ってきたところでお昼にしようという旦那に対して一八が「そんなあんた、神さん参りに来てまんねやで。そんなこと言うたらあきまへん」と咎める(第一卷)。旦那は「あかんかえ」と問い返す。「あかんか」という形とはほぼ同程度の丁寧度に聞こえるが「あかんかい」では少しきつい感じがする。噺『鉄砲勇助』には、千三つと呼ばれる嘘吐き男の法螺話が満載である(第五卷)。木曾の山中は昼間でも暗いという言に、話し相手は「そない暗いかえ」と相槌を打つ。この話し相手というのは特定されていないが、話しぶりから推察すると横町の甚兵衛さんらしい喋り方である。

この「かえ」がサゲに使われているのが噺『高尾』である(小佐田氏『上方らくごの舞台裏』、先代(三代目)春團治師の口演から)。江戸ネタでは『反魂香』という名で、この香を焚くと吉原の高尾太夫が姿を現すという。三年前に亡くした女房おちょねに会いたい一心で、長屋の喜六は夜中に薬屋に駆け込んで反魂丹を手に入れて、早速燻べる。部屋中に煙が朦々と立ちこめ、表の戸をどんどん叩くので喜んだ喜六、「そちゃ女房、おちょねじゃないか」と声を掛けると「あほらしい、隣のお梅。かんこ臭いはお宅かえ」でサゲとなる。反魂丹というのは胃腸薬、「かんこ臭い」とは焦げ臭いの意である。反魂香は高尾太夫を呼び出す折にしか効果を發揮しない霊薬であるが、それと取り違えて反魂丹を燻べたので隣家のお梅さんが駆け込んできた、という筋になっている。

「や、やい、やいな、じゃ、じゃい」

終助詞「や、じゃ」の意味・範囲や使われる状況も多様である。『大阪ことば事典』で、「ジャイ」という見出し語で次のような説明が成されている。「だ。じゃ。東京の「そうだ」に対して大阪では「そうじゃ」であったが、今ではほとんど「そうや」となっている。ただ言葉を荒く使う場合に、なんじゃい・誰がこんなことをしやがったんじゃいなどという」（313頁）。この説明で「や」と「じゃ」の関係についても、概略は尽くされていると言えるであろう。つまり、「じゃ」の方が野卑度が高いのである。「なんじゃい」の例を、噺「看板の一^{びん}」から引く（第二巻）。若い者が寄って賽子で博打をしている。年配のご隠居を引き込もうと声を掛けると、ご隠居は「なんじゃい」と荒っぽい返答である。その後、胴元を取って賽を振ったご隠居が「看板」として壺の外に出しておいた賽子を「ちょっとこっちへ直しとく」と懐に戻す。これに驚いた若い衆は、「親爺っさん、それ何をすんのやいな、それ」と咎める。「わいな、かいな」と同じように「何をすんのやいな」と最後に「な」を足している。「何をすんのやい」では荒すぎる。

もう一例の「じゃい」は、噺『胴乱の幸助』からである（第五巻）。喧嘩の仲裁が趣味という割り木屋の当主が、相対喧嘩している二人の間に割って入って「ちょっと待て、お前らわしを誰や知ってるか」と尋ねる。「あんた割り木屋の親爺っさんでんな」という返答に、「知っててくれりゃちようど幸いじゃい、この喧嘩わしに任すか」と事が運ぶ。胴乱の幸助というのは渾名であるが、喧嘩の仲裁をする必要からか、この人物自身も相当に荒っぽい言葉遣いである。この幸助はん、堅気の衆では一番に口調が荒っぽい。稽古屋で義太夫節『桂川連理柵』帯屋の段を語っているのを小耳に挟んで、本物の嫁いびりと勘違いしてしまう。お半と長右衛門のことと聞いても要領を得ないので、「お半長てなんやい」という調子である。「なんやい」というような強い口調は、他の噺でも例を見ない。

次の例は田舎言葉で、典型的な例からは外れるかも知れない。噺『夏の医者』は、隣村まで三里半、近隣近在に医者が居らんという山里という設定である（第五巻）。父親が萵苣菜を食して具合が悪いという男の見舞いで、医者が山越えの道中、二人ながらに蟒蛇に吞まれてしまう。医者は「松の木じゃなどとききやがって、ありや木じゃありやせんがな、うわばみじゃい」と田舎言葉である。蟒蛇に吞まれて、尻の辺りから溶かされてきたような気がするという男に対して、「そりゃ気のせいじゃい」と医者は宥めにかかる。田舎言葉ではあるが、「じゃい」というのは素朴で荒っぽく聞こえる。

噺『つる』で、甚兵衛さんの悪口を傍で聞いていた男が「さあ、わたいの男や。腹に持っても口には出さん」と反論を控えた言い訳をする。すると甚兵衛さんが「何が男やいな。それではなんにもならんやないかいな」と返す。「やいな」には反論の調子を込めている。「なんにもならんやないかいな」と同様である。「やいな、かいな」は共に柔らかい語調である。この辺り、甚兵衛さんの柔和な人柄が表れていると言える。

次は噺『天狗裁き』で、夫婦の会話である（第五巻）。喜六が昼寝で見ていたらしい夢について、夫「ほんまにわしゃ夢なんか見てえへんのか」、妻「あ、そう。……ええがな。昔からあんたはそうや。……薄情なところがあるねん」と言い争いになる。その後、隣家の徳さんと家主が順に仲裁に入る。家主に対しては、喜六は夢を見ていないと言うと、家主が「ここへ入る時には、いつ何時でもご入用の節には家を空けますという、一札がこっちへ入ったあるのじゃ、ええ」と店立てを迫る。「あるのじゃ」は「あるのや」よりも強硬である。つづいて、お裁きの場面に移る。ここでもお奉行が「こりゃ、町役とか家主なんぞと申すものは、下々、町人百

姓どもの鑑ともならんければ相成らんものじゃ」と家主を諭す。ここでは奉行の言葉遣いとして重みを持たせている。『天狗裁き』という噺は、喜六が見た夢を巡って、最後は天狗が喜六を鞍馬の谷間まで連れてくる。奉行に松の木に吊されていたのを助けたのである。そして喜六に「そのほうに罪はない。不憫なゆえをもって助けとらしたのじゃ」と告げる。このように、家主、奉行、天狗と立場上の言葉遣いで「じゃ」という終助詞を多用しているものであろう。

以上、ここで検証した終助詞の類を纏めると、次のような傾向が窺える。二拍目が「い」である「やい、じゃい」で終わる形は野卑度が高く、女性は用いない。これに「な」を足して「やいな、じゃいな」となると語感はやさしくなるので、男女両用である。

「な、ない、ないな」

終助詞「な」にも複数の意味合いがあるが、最も重要であると考えられるのは禁止命令である。現代の標準的な日本語においても「するな」というように「な」で出現する。これが「ない」と二拍目に「い」を足した形でも、意味としては禁止命令で変化はない。これに更に終助詞「な」を足して「ないな」となると、語感が緩和される。差し当たり、現代の標準的な日本語であれば「してはいけません」と言い切るところを「いけませんよ」と、終助詞「よ」一字を足すことによって劇的に語感が柔らかくなるのである。

まずは噺『軒付け』から、禁止命令「な」の例である（第六巻）。軒付けというのは古く、素人が義太夫節を習うのが盛んであった頃、他家の軒先を借りて勝手に語り出したという風習である。太棹の三味線を習い始めて間もない天さんが、立って三味線を弾くのは初めてというので手の空いている人に頼んで胴を持ってもらう、天神を持ってもらうと一騒動である。三味線の胴と天神を支えてもらえば手放しでも弾けると言う天さんに、支えている方は「離しなはん、これ、何をするねん」と慌てる。「離しなはん」と敬語の「なはん」と挟んでいるが禁止命令である。もう一例は噺『初天神』からで、やはり単純な禁止命令である（第六巻）。長屋の住人又ははんは、子の寅ちゃんに一月二十一日の初天神に連れて行くことをせがまれて難儀している。とうとう、「いやあ、もうわかった、わかった。ごちゃごちゃぬかすな、ほんまにもう」と音を上げる。

この「な」に二拍目の「い」が付いて「ない」となっても、意味は禁止命令のままである。噺『はてなの茶碗』では「ない」形が見られる（第六巻）。清水の茶店で、茶道具屋の金兵衛さんが「はてな」と首を傾げて帰った茶碗を買い取ろうと考えた担ぎの油屋が、身代限りの二両を出そうと茶店の親爺に持ちかける。しかし親爺は「せっかくやけど、この茶碗、二両や三両ではよう売らん」と断る。油屋は「そんなこと言うない」と食い下がる。

次に、同じ禁止命令ではあるが複雑な「ないな」の例を噺『軒付け』から挙げる。義太夫節を習い始めた男が、『忠臣蔵』五段目を仕上げるか仕上げないうちにお温習いの会に出たという。出だし「へまとも降り来る雨のあし」に、聴衆から「よいよい」と合いの手が入る。「へ人の足音とほとほと」「こりゃ、こりゃ」「へ道は闇路に迷わねど」「あ、どっこい」。男は暢気に「これがよう合うねん」と言えば、聞き手は「合わしないな、そんなもん」と突っ込みを入れる。これを仮に「合わしない、そんなもん」とすれば、語感が荒い。「な」一字を足すことによって随分と大きく語感が緩和されているのである。『はてなの茶碗』でも、茶店の親爺が油屋に「こんな無茶な奴にかかったらかなわんな。そんな殺生なこと言いないな、おい」と説得に掛かる。

統語論的に興味深いのは、「言うない」は終止形の「言う」に終助詞「ない」が付いている

と考えられるのに対して、「言いないな」では連用形「言い」に「ないな」が付いているという違いである。「言いない」とも言えそうであるが、実例は見られなかった。「言うない、言いないな」と口調の違いであろうか。

「し」

旭堂南陵師が「やし」という語尾を島之内言葉の例として挙げておられる（『事典にない大阪弁』）。「語尾を少しあげ気味に「やし」で切る言い方は、島之内やミナミの花街の女性が言う言い方です。船場では使わない言葉どころか、船場で使おうものなら大目玉をくらったものです」という説明がある（142頁）。このような指摘は、当地で生まれ育ったものでないと分からない点があって、貴重である。ここでは、「やし」を助詞「や+し」という連続形と分析する。『大阪ことば事典』には「シィ」という見出しで、「そうやシィ・いかれへんシィのシィである。女の言葉であって、そうですよ・行かれやしないよのヨに当る。男の場合は、これがデェに変わって、そうやデェ・行かれへんデェとなる」という説明と用例が挙がっている（293頁）。標準的な日本語の対応例として牧村氏は「行かれやしないよ」と当てたのであろうが、現代的感覚で言うならば、女性語であるということを加味して「行けないわよ」というぐらいであろうか。

まずは『稻荷俤』という噺からの例である（第一巻）。車夫の梅吉、高津神社から産湯楼まで乗せた客が車中に忘れ物をする。それに気付いた妻女が「いいええな、これ……お金やし、えらいこっちゃ」と驚く。この「お金やし」は「お金であるし」という後続表現ではなく、終助詞の「し」と解すべきである。それは終助詞「し」がないとして「お金や、えらいこっちゃ」で意味が通るという理由からである。これもまた庶民的な語感である。続いて噺『初天神』では、長屋の住人、又はんの子である寅が、一月二十一日の初天神に連れて行ってもらおうとて、親子でござと話し込む。父親の又はんが子連れで遊郭に登り、寅ちゃんは娼妓に抱っこされて妙な気分になった、と告白したところ、母親が「何を言うのや、この子。……今からそんなこと言うてたら、えらいし、この子はほんまに」と嘆く（第六巻）。「えらい」というのはここでは、「末恐ろしい」というほどの意である。噺『崇徳院』では、手っ伝いの熊五郎が若旦那恋煩いの相手を首尾良く探し出したら借金五軒と礼金三百円と聞いて、妻女は「こっちに運が向いてきたんやし。しっかりやんなはれや」と亭主を嚇ける。

次に『悟気の独楽』という噺から引く（桂文太師の口演筆記）。当主が二号さんを囲うていと呪んだ女子衆のお竹どんは、御寮人さんのために事情を探ろうとしている。一計を案じて、当主のお供に付いて行った定吉に饅頭を食べさせる。半ば無理矢理に食べさせておいて、「そのお饅頭には熊野の牛王さんという物が入ったあるのん。それ食べて嘔吐したら、血い吐いて死ぬし」と告げる。南陵師の説明からすると、たとえ女子衆であっても「血吐いて死ぬし」という言い方は船場では許されないであろう。そうすると、これは島之内辺りの商家ということになろうか。

次も口演筆記であるが、枝雀師による『舟弁慶』からの例である。「雀のお松、雷のお松」と二つ名を持った喜六の女房、近所のおかみさん連中と難波橋へ夕涼みに行く。すると、亭主の喜六が「喧嘩の仲裁にミナミに行く」と出て行った筈が、川一丸という船の上でドンチャン騒ぎをしている。近所のおかみさんが、「あれ、喜イさんと違うか、よう似たあるし」と喜六を指さす。いかにも庶民的な語感がする。

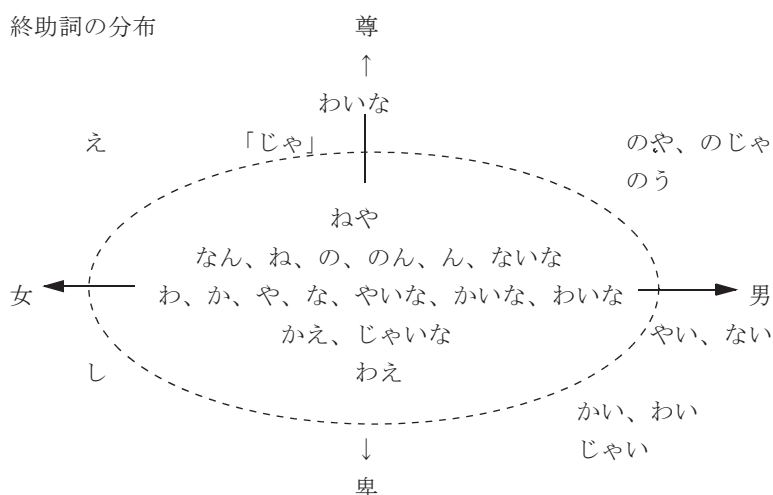
もう一例は『占い八百屋』という珍しい噺から引く（桂文我師『続 復活珍品上方落語選集』）。

八百屋の善六さん、得意先の田中屋さんで俄仕立ての算盤占いをして面目を施したまでは良かったが、八卦見に江戸まで行って欲しいと頼まれたので長屋に逃げて帰ってくる。それを妻女が、「息は（しても）ええけど、静かにしてなはれ。表に誰か来はったし」と匿う。「誰か」とは田中屋であるが、「来はったし」というのは、いかにも長屋の妻女らしい物言いである。

第四節 待遇表現終助詞の纏め

ここまで、上方言葉に見られる終助詞を尊敬語と卑罵語に分けて検証してきた。但しその区分は相対的である。また本文では尊大語と謙讓語には触れなかった。これは、謙讓語独自と言える終助詞が見当たらなかったこと、尊大語として考えられる用例の終助詞は大部分が尊敬語や卑罵語と分類した中に見受けられること等が関わっている。尊敬語の節で、奉行がお裁きの場で「の、のう」を連発していたのも尊大語の用法と考えられる。尊大語独自の例と考えられるのは、噺『宿屋仇』で明石藩士万事世話九郎と名乗る侍が、日本橋の紀州屋源助という宿屋で「些少なからこれを遣わすぞ」と言いながら店の者に心付けとして銀一朱（数千円相当）を渡す場面がある（第七巻）。ここでの終助詞「ぞ」は、男性語として現代日本語全般にも用いられる。全般的には「ぞ」という終助詞は尊大語的な場面に限られるものではなく、広範な場面で日常的に発せられて居るであろう状況が想定される。また、文語時代からの連続性もあるものと考えられる。しかし上方言葉に限っては「ぞ」が終助詞として単独で発せられている实例は見いだされず、「で」で置き換えられるであろう。「些少なからこれを遣わすぞ」というのは全体的に侍言葉であるので、町人風に言い換えるとすれば、「少ないけど、これ渡しとくで」というようにでもなるであろう。^{*5}このような理由から、本論考では「ぞ」単独、あるいは尊大語を独立した節として採りあげることはなかった。

それではここで、ここまで検証してきた終助詞を男女差を尺度に入れて図示してみる。侍言葉など尊大語としての終助詞も意外に少ないという印象である。お裁きで奉行が頻用する「のう」の他には、侍言葉としての「じゃ」が見られる程度である。但し、その「じゃ」は低い丁寧度で位置付けた。これは、人称代名詞の「わし」と同じように幅広い使われ方をするため



ある。中央で塊になっているのは、男女共用の語類である。破線の楕円は、「じゃ」が尊大語から卑罵語にかけて広い範囲に及ぶことを示している。これこそ、話し手と場面と状況に応じて分析が変わってくるという一例である。

まず最大の特徴と考えられるのが、男女共用の部類が多いという点である。義太夫節での「わいな」は純粋な話し言葉とは異なる面があるので丁寧度が突出しているが、「ねや」から「じゃ」までは塊になっているように密集している。女性語として「え、し」があるが、卑尊度は上下に離れている。男性語では「やい、かい、わい、じゃい、ない」と二拍目が「い」になる五語が何段階かの卑尊度に分かれて分布している。これら五つの終助詞は非常に荒っぽい語感を持つ。特に「じゃい」は「なんじゃい、そうじゃい」というような短い発話が多いという傾向が窺えるが、荒い気質の人物が専ら使う部類である。これら五語に更に「な」を足して「やいな、かいな、わいな、じゃいな、ないな」とすると途端に丁寧度が上がる。「じゃいな」のみ一段下に置いたが、「やいな、かいな、わいな」の三つは中立の卑尊度に位置する。「な」一拍の有無によって、語感と丁寧度に大きな違いが生じる例である。

音声学的には特殊拍である「ん」が「の」から派生した音型として終助詞の機能を果たす点が興味深い。終助詞には「わ、か、や、な」など一音節の音型も多いが、これらは皆独立した音節となり得る形である。上述したように、これら一音節音型終助詞には二拍目「い」が付き、最終的に「な」も加わって三拍になる。非常に体系的な語形成の過程である。

注

- * 1 現代中国語では、全ての統語範疇で時制や格等に伴う文法的変化はない。ここでは、日本語の終助詞と対照させる意図で「無変化」と記述している。
- * 2 以下、創元社版の米朝全集からの引用は巻数のみ表示する。筑摩書房版は、その都度表示する。
- * 3 板屋橋とは、船場にある通り及び橋の名である。
- * 4 「口演筆記」として引用したのは、以下のインターネットサイトからである。「特選 上方落語覚え書き」<http://kamigata.fan.coocan.jp/kamigata/index1.htm>
- * 5 語彙項目別には、「些少ながら」→「少ないけど」、「遣わす」→「渡す」、「ぞ」→「で」というように対応させることができるであろう。いずれも、尊大語と一般的な言い方との対照が興味深い。

参考文献

- 井上史雄（編、2017）『敬語は変わる 大規模調査からわかる百年の動き』東京：大修館。
井上史雄・遣水兼貴（2017）『「敬語の指針」に見る現代敬語の性格変化』井上（2017）所収。
小佐田定雄（2018）『上方落語の舞台裏』東京：筑摩書房。
桂枝雀（1995、1996）『桂枝雀爆笑コレクション』全五巻、東京：筑摩書房。
桂文我（2002）『続 復活珍品上方落語選集』大阪：燃焼社。
桂文我（2014）『伊勢参宮神賑』東京：青蛙房。
桂文我（2016）『初代桂文治ばなし』東京：青蛙房。
桂米朝（2002、2003）『上方落語 桂米朝コレクション』全八集。東京：筑摩書房。
桂米朝（編、2007）『四世桂米團治寄席随筆』東京：岩波書店。

- 桂米朝（2013, 2014）『米朝落語全集』全八巻、増補改訂版。大阪：創元社。
- 角岡賢一（2017a）「上方落語に見られる軽蔑語の実例」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第26巻。pp. 95 - 114。
- 角岡賢一（2017b）「上方落語に残るお茶屋文化」『京都産業学研究』第十五号。pp. 125 - 142.
- 角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第28巻。pp. 3 - 22。
- 角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉、他（編）所収。
- 金沢裕之（2000）『近代大阪語変遷の研究』大阪：和泉書院。
- 神尾昭雄（1990）『情報の縄張り理論』東京：大修館書店。
- 神尾昭雄（2002）『続。情報の縄張り理論』東京：大修館書店。
- 菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
- 旭堂南陵（2019）『事典にない大阪弁』増補改訂版。大阪：浪速社。
- 真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
- 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 釈徹宗（2017）『落語に花咲く仏教』東京：朝日新聞出版。
- 高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇B。
- 唐玉紅、鄒善軍（2015）「確認要求を表す「だろう」と「吧」の日中対照研究」日中対照言語学会『日本語と中国語のモダリティ』東京：白帝社。
- 東大落語会（編、1994）『増補 落語事典』改訂版。東京：青蛙房。
- 田辺聖子（1985）『大阪弁おもしろ草子』東京：講談社。
- 竹田晃子（2017）「卑罵語と敬語の発達」井上（2017）所収。
- 日本語文法学会（2014）『日本語文法事典』東京：大修館書店。
- 北京商務印書館、小学館（1992）『中日辞典』東京：小学館。
- 前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本稿店。
- 牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
- 米倉よう子、山本修、浅井良策（編、2020）『ことばから心へ 認知の深淵』東京：開拓社。